

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | |
|------|-------|---|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 |
|------|-------|---|

氏 名 水川 敬章

論 文 題 目

澁澤龍彦文化圏の研究——サド裁判から押井守まで

論文審査担当者

| | | | |
|----|--------|-----|------|
| 主査 | 名古屋大学 | 教授 | 坪井秀人 |
| 委員 | 名古屋大学 | 教授 | 藤木秀朗 |
| 委員 | 名古屋大学 | 准教授 | 日比嘉高 |
| 委員 | 名古屋大学 | 准教授 | 加藤靖恵 |
| 委員 | 甲南女子大学 | 教授 | 馬場伸彦 |

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は作家・澁澤龍彦が1960年代から1970年代にかけて形成した文化圏、いわゆる〈澁澤文化圏〉に関わる諸問題について考察し、澁澤の同時代に彼の周辺に生じた文芸活動を論じるとともに、時をこえて系譜づけられる2000年代以降のアニメーションやマンガ、ここでは押井守の作品を取り上げ、様々なメディア論的な視座と表象分析をもとに研究したものである。本論文は3部構成による全7章から成り、それに序章と終章が付されている。所収論文のうち3篇は学術雑誌に掲載された審査付き論文、また1篇は公刊されている学術論集に発表されたものである。

第1部「澁澤文化圏の可能性」においては、澁澤文化圏の文学的・批評的な可能性に関する議論が喚起されている。第1章においては、澁澤の作品『唐草物語』の幻想性について、それが作中のエッセイの部分が作者像の実体的反映として読者に読み解かれることから構築されていると論じられている。第2章では、澁澤が被告人として臨んだサド裁判が取り上げられ、裁判に関わる澁澤の文学的営為を再構成し、その批評的意義が捉えられている。そしてこの裁判を澁澤が《勝手気まま》という戦術によって乗り越えようとしたと論じる。第3章では、澁澤文化圏に属する表現者、土方巽の舞踏に対する種村季弘や澁澤らの批評言説を分析して、土方をめぐる東北イメージが差別的視角において形成されたこと、土方の舞踏を語る言説が《小児マヒ》というメタフォアを用いたことを問題視し、差別意識に満ちた彼らの批評がマジョリティの感性を反映する中で、土方の前衛的な表現が受容されていると批判的に論じている。

第2部「澁澤文化圏の問題性」では澁澤文化圏のある種の限界を明らかにしようとしている。第4章では澁澤が責任編集した『血と薔薇』創刊号～第3号の一連の言説と図像の文法が抽出され、それが生起するイメージについて論じられている。そこでの言説と図像の相互作用が分析され、同誌のイメージ群に内在するアナクロニズムの戦略が、澁澤の思想と照らして検討されている。第5章では澁澤文化圏の影響圏内にあった創刊当初の雑誌『an・an』が分析され、依田富子の論考を導きにして、ウーマン・リブと紐帯を持つ『an・an』が『血と薔薇』に見られた女性イメージと捻れた関連を持つことを明らかにしている。

第3部「澁澤文化圏の現在性」では、澁澤文化圏が現代にどのように継承されているのかを押井守の作品を通じて論じている。アニメ映画『イノセンス』の読解を行う第6章では澁澤文化圏における球体関節人形と少女をめぐる価値規範との関連が論究され、登場人物・草薙素子のバイナリーな表象から暴力性の問題に考察が加えられている。第7章では押井の原作になるマンガ『腹腹時計の少女』における全共闘運動と女性表象の問題が論じられ、〈赤頭巾の少女〉のイメージを、女性の抵抗可能性とともに女性への暴力性を提示するものとして捉えている。その点から押井作品における少女表象が、澁澤文化圏の少女・女性表象と通底する問題を抱えると結論づけている。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

澁澤龍彦は彼自身の特異な創作においてばかりでなく、その周辺に種村季弘、巖谷國士らの文学者や土方巽、唐十郎といった舞踏・演劇人が集まって一種の文化的サロンを形成した点において特筆すべき作家であった。澁澤を中心とするその文化圏は1960年代から1970年代にかけてのアングラ文化を含む文学・芸術文化の一角を担ったにも関わらず、その意義を明らかにする本格的な研究はこれまでほとんどなかった。近年、澁澤個人の文学に関する研究は優れたものがあらわれてきているが、澁澤文化圏に関する研究の欠落は作家個人単位の作家論研究の枠組の呪縛の大きさを裏書きするものと言えるだろう。本論文はこうした陥穽を回避すべく文化圏という枠組みを理論的な基盤に据えることで、澁澤龍彦を交差点として共時的な知的ネットワークを描出するとともに系譜学的（通時的）な視点からその継承反復の現代的可能性を浮彫にすることを可能にしたと言える。メディア論的な方法や複数のジャンルを跨っての表象分析の方法を用いてこの澁澤文化圏に関わる諸問題を考察したここでの研究は、こうした研究の停滞に一挙に風穴を開ける挑戦的な試みとして評価することが出来る。

澁澤文化圏の所産として夙に名高い雑誌『血と薔薇』の諸言説を様々な図像とともに分析し、その視覚／言語イメージの背後にある問題性を批判的に明らかにしたことも本論文の功績の一つに数えられよう。加えて、女性雑誌『an・an』をこの『血と薔薇』と表裏をなす澁澤文化圏の産物の一つとして位置づける視点も新鮮であり、同時代のリブの運動とのアンビヴァレントな関係をうかがわせるなど、多面的問題に気づかせるきわめて可能性の豊かな内容を含んでもいる。暗黒舞踏の土方巽の活動を澁澤文化圏の枠組みから再定位しようとした研究も、この文化圏の持つ土俗的な側面を剔抉する意義を持っている。本論文はしかも、澁澤や土方らの芸術的営為を単に称揚するのではなく、女性や地方の表象に巣くう種々の問題性や限界にも的確に論及しており、澁澤文化圏の内包する複雑な性格を丁寧記述している。小説、エッセイ、写真や挿絵などの図像、アニメーションとマンガなど、複数の表現ジャンルを横断し、それぞれのジャンルの特性に対応しながら柔軟かつ鋭利に論じ捌く著者の理論的な思考と論述はあざやかであり、表象分析の手法の一つのスタイルを提示することに成功している。澁澤が先駆的に紹介したハンス・ベルメールの球体関節人形のイメージが押井守のアニメ作品と系譜的に接続する点を解明した点など、各論的にも発見は少なくない。

澁澤文化圏の全体像が必ずしも整理されていないために〈文化圏〉という問題設定が十分に機能していないこと、シュルレアリスムとの関わりなど前史との関係からの位置づけ、押井作品を論じた第3部との接続が不明確である点などが問題点として指摘されたが、これらは本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断した。